

新美秀粹想
アフオリズム集

黒川 正著

新美秀雄
江苏艺术学院图书馆
章
想
集

黒川 正著

黒川 正（くろかわ・ただし）

昭和6年三重県津市生まれ。津高・三重大卒。津市及び久居市内の小・中・高等学校の教職を務め、その間、三重大学教育専攻科、名古屋大学文学部研究生として道徳教育を研究。

現 職 有限会社日本ランド、未来証券信用株式会社他
代表取締役。現代研究会主幹。

編著書 「たらちねのうた」（昭52）「詩集心の彷徨」
（昭53）「美秀粹想」（昭61）「幻の正論」（昭
62）他。近刊予定に「詩集『心の彷徨』と詩論
研究」がある

新美秀粹想 ——アフォリズム集——

*

*

平成9年2月15日 初版発行

著 者 黒川 正 ©1997

制 作 ゲンダイ株式会社

現代研究会

発行所 株式会社ミリオン書房

東京都港区新橋 1-6-7(桐村ビル)

☎ 03(3573)1277 〒 105

振 替 00150-7-0082410

印 刷 壮光舎印刷株式会社

定 価 2,000 円（本体1,942 円）

■落丁乱丁本はお取替いたします・不許複製

ISBN4-943948-59-6

序 文

人生においては、というより日々の生活において吾人は常に抱いている課題とは別に、ふと気がついて、それが案外妥当で普遍的でしかも真理を穿ったようなことばを思いうかべることがある。

即ち一般的で納得度が高く、しかも人生の機微にふれて教訓ともなることが、短い表現にてしかも俚諺とは別な取扱われ方をして生まれ出るものがある。そして日常生活以外に、より知的高度性を帯びてくることもあるが、この真理性は高く、強く、表現まことに巧にして断片的表現とはいえ、一つのまとまりある真理観の表現をしているものがある。

これが断片想・思想的短文というもので、機智的諷刺的短縮表現・アフォリズムといわれるものである。

かつて西洋においてはモンテーニュ、そしてパスカルが、そしてニーチェはその箴言に巧みなる表現をなして、「これ——アフォリズム」として成功しているし、中国にお

いては、論語・十八史略などに名言・成語として集録され、史実等にも基づき、比喩的表現・名言の数多くの一部を遠き昔の時代に見出すことが出来るが、日本においては萩原（朔太郎）と芥川（龍之介）がこの表現において成果を収めている。

即ち萩原においては、「月に吠える」「虚妄の正義」があつて、多少の長々しさは感じられるも、これは俚諺との比較からくるものであろうし、芥川においては「侏儒のことば」とて、言葉の珠が輪と連なつて一まとまりするが如く巧みなる又端的要領よく表現されているものがある。

今日、物事が簡単なる操作により、便利に効率的に、処理・運転・利用される時代に至つては、文章も表現も端的にして真理とその想いを述べんとするに至つたというは過言でもあるが、再び短縮表現が、現代文学の野辺にて掘られてもその意義やあろう。

科学性の高い今日においては多くの定理・定義を生み出しているが、わがアフォーリズムはその定義が如く規定はしないまでも、すべてを概略的にまとめて表現しない中にも、相異なる真理観のあらゆる角度から無形とはいえ、真理・真実の投影したものとして種々様々に表現したものであろう。

世界観・人生観を対象としたものが哲学なら、更に社会観を加えて難易的長論をもって

論ぜずして断片の想いの中にも端的に一つのまとまりをもって、表現したものがアフォーリズムであろう。

ボタン一つで多くの機械がその性能を発揮し、その成果を得ることが出来るように、アフォーリズム一つから多くの真理の投影を多種多様な観点を求めることも出来るように、時としては学問的分野のいとぐちでもあり、ある時は究めゆく、その奥義の頂点でもあろうが、対象的、理論的真理の論述に非ずして、主体的パトスの真実の伝達がアフォーリズムであり、又その中には処世の術の教訓でもあつて、理論的・体系的表現よりも寧ろ機智的諷刺的短縮表現なる姿をアフォーリズムにみることが出来るであらう。

ここに私は、先人の作品・表現を発掘吟味すると共に、自分の表現をまとめ収録した次第である。

真であれ、善であれ、美であれと希^{ねが}うも、真は観点の相異あり、善は社会・人生の裏面性もあつて、その表現は逆に善の強調にもならぬこともある。美については短的・端的表現が譬喩と共に美しいコンパクト・スタイルを創っているかもしれない。

アフォーリズムは、美しく、秀れた粹^{すく}な表現でありたいものである。

処世の尋常茶飯事から高度学問の域に至るまでの広範囲から、先述の如く世界観・人生

観・社会観の中から生じたものとして、心打ち納得の多くと更に知的栄養となるものも多
かろう。

かつて西欧にはモンテーニユー、ニーチェがこの表現に成功し、又パスカルもこの表現
形式をとっているが、わが日本におけるこの表現、アフォーリズムの成功者は、実に私、黒
川正であると自負し、自惚心をもつて著作しているのである。そして当「新美秀粹想」は
その追加版・修正版としたものである。

「物事は過信に至らぬ自信と放漫に至らぬ意欲が必要なるはいうまでもない」

物質文明の豊潤性と精神文化の高度性を大きくミックスした文化的所産として、この書
の出現が、現代文化の発展に拍車がかかり、未来飛躍発展のステップとして、現代の思
想・文芸面の発展と共に高次性が加われば、新美秀粹想は時代の輝きと共により輝きをま
すであらう。

平成八年師走改稿

著者 識

中 目 次

序文…… I

政治・經濟・法律・國家…… 9

科學・藝術・學問・思想…… 19

社會・人生・友情・戀愛…… 67

教育・文化・宗教・道德…… 97

過去・現在・未來・時間…… 125

新しき時代（考）…… 135

新しき時代…… 141

結文…… 198

新美秀粹想

政治・經濟・法律・國家

破壊が建設の第一歩であるといえる場合、建設は更に意欲を旺んにする。

耐乏、耐久、辛抱強さ、明日を夢みる今日の努力がなくて安易となっているのではないか。しかし明日への蓄積を考えずとも今日を豊かにそして明日は又今日の豊かさ以上になる見透しがあるのだろうか。

太平洋戦争において日本は敗けたが、二十世紀、四半期後半の日本は、世界に勝っている結果がでている。

事件トレースと主張が訴訟であり、その法を司ったその判決で、判決の瞬間に過去トレースが未来への展開となってくるのだ。慎重になさるべきである。

地球は人類共有資産である。これをいかに配分・利用するか、使用するかが国際問題でもあり、国家トップ幹部の仕事でもある。賢明に利用するか、愚かに墮するかで人類の未

来の運命は方向づけられる。

長さはじめ尺度・面積・量すべて単位があり、殆どのものには、数字があり、計数が可能である。しかし人はその寿命、その職業、個性によって異なろうが、人は生涯の中に、どれ程字を書くか——日本人なら、たべた米粒の数と書いた字の数とどちらが多いか考えてみたことがあるか。

無駄か必要かは知らないが、現世は社会の現実、無駄によって利益をあげ又、楽しんでいるところもあるからだ。

高度物質文明下において消費は美德なるも、ぜいたくは心を蝕むこともある。

消費の上を生産がいく筈。その生産の必要量の上を原材料が応じなければならぬ。

時間はその原材料・資源の数を作らねばならぬ。有限の筈の資源が無尽蔵といえるよう迫いかけられている。

物質的にゆたかな時代、社会的に欠乏のない潤沢な時代の非行こそ個人も社会も政治も教育も重要視して再考、反省、配慮せねばならぬ時代になっているのである。

科学・技術にもターミナルはあっても、電車・汽車・バスのようにやはり起点であることが必要であろう。

社会哲学という分野をつくれば、社会哲学とは自己の社会に表現し、影響しうる力と可能性の限界を究めるものであらう。

核兵器は二大勢力の巨頭の人類を思う心にてコントロール可能なものである。人類を壊滅に落とすか、繁栄に導くかは、彼等の良識と判断にある。

科学の最新鋭武器の利用・制御は実に世界二大勢力の政権の頂点にあつて、その指導者及びその集団が人類をして愚かなる方向に、導かざるようにすべきである。

犠牲なくして或は最小限にして繁栄と発達と安定を——平和を築くことに世界の指導者は尽力することを希^{のぞ}む。

繁栄・平和の歴史は時間、期間的に長くとも後世の歴史（政治史）にとつては或は表現が短いかも知れない。

そして事件・戦争他々のことについては、原因と事象と結果等長く記載されることが多い。

その点において歴史は政治史（事実史）は、一きわ角ばった事象でないと歴史化されることに乏しいともいえる。

「他史即ち文化史、経済史……等、専門的分野からの歴史は別として……」

繁栄と滅亡の分岐点——日本機はどうなるかを考えてみよう。

地球海の不沈空母は実にアメリカにして、その空母を母艦とするのが日本ではないか、幸い性能よい優秀な日本機（飛行機）は、世界に躍進、飛び躍っているからよいが宇宙を知らない。

アメリカ母艦は更に宇宙開発・ロケット開発もしている。日本機の活躍がどのようにいつまで続くのであろう。

中国飛行船もすでに離陸可能になった場合、そのエネルギー・ポリウム・飛翔力は大なるものがあるのだ。

二十一世紀は宇宙科学の時代ともいえる。世界平和を前提として先進国家の超高度組織化と後進国・発展途上国の現先進国並に至るレベル・アップであろう。

世界国家即ち国際関係において平和共存・物質文明の豊潤さの地理的拡大も課題の一つであらう。

経験は知識を喰う場合がある。身についた切実さからは強い力を産むものがある。

クレオパトラの鼻より高い鼻柱と筆が日本を世界を変えるかも知れぬと——というより